上段左より『倭訓栞』前編、中編、後編
下段左より『倭訓栞』中編見返し、後編見返し（すべて三重大学附属図書館所蔵）

CHRONICLE OF MIE
VOL.11
【文学編】

# 谷川士清と『倭訓栞』

国語辞書『倭訓栞』は、九十三巻八十二冊総語数二万八千九百七十五語の大著。五十音順を用い、日本最初の近代的国語辞書ともいわれる。士清没年の翌年（一七七七）より刊行が始まり、最終巻の刊行は明治二十年（一八八七）。完結まで百十年の時を要した。

吉丸雄哉 よしまるかつや
人文学部・文化学科准教授
専門は日本近世文学

人に運の良し悪しがあれば、本にも運の良し悪しがある。津の国学者谷川士清（たにがわことすが）と、その著作『倭訓栞（わくんのしおり）』を対象に人と本の運不運について考えてみたい。士清は、現在の津市八町で、代々医師の家に生まれた。士清は京で医学と神道・国学を学び、享保20年（1735）27歳で地元に戻り、医業に携わるとともに、学問教授の塾である森蔭社を開き、古典の研究と教授にも心を砕いた。旧宅は史跡として保存されている。近所には士清ゆかりの谷川神社が大正期に創設された。現在も谷川士清の会が、士清の功績の顕彰と普及を行う。津ではよく知られた人物といえる。

『倭訓栞』以外の士清の業績では、『日本書紀』全体に注釈を施した『日本書紀通証（にほんしょきつうしょう）』（1762）が著名である。『日本書紀通証』の全語注釈から言葉への関心が高まり『倭訓栞』の執筆につながっていく。石水博物館所蔵の谷川士清自筆稿本『倭訓栞』は宝暦7～11年（1757～61）頃には完成していたようである。このことから、宝暦元年（1751）に『日本書紀通証』の原稿が完成した後、間を置かずに『倭訓栞』の編纂に着手したと思われる。『倭訓栞』出版直前の稿本の写しも石水博物館に残っている（士清の曾孫である清逸（すがはや）が再転写した本で清逸本『倭訓栞』と呼ばれる）。清逸本『倭訓栞』こそが、士清が当初考えていた『倭訓栞』の完全な形を示す。これがすみやかにそのまま出版できたのであれば、何の問題もなかった。

しかし、そのまま出版するには費用の問題があったのだろう。前編には古言・雅語、中編に雅語、後編に方言・俗語という三部構成へ予定を変更して、士清は出版することにした。また項目や内容が一部省略されることになった。士清が没した翌安永6年（1777）から『倭訓栞』の刊行は始まる。細かくなるが、出版の苦闘を知らせるために、出版年次を以下に記す。前編45巻34冊のうち、まず14冊を安永6年に。息子士逸（ことはや）と賀茂季鷹（かものすえたか）の校訂により次の10冊を文化2年（1805）に。孫の士行（ことつら）が資金を工面し最後の10冊を文政13年（1830）に刊行した。前編だけで50年以上かかった。中編30巻30冊は文久2年（1862）に刊行された。校訂者も資金提供者も不足しており、後編の出版は難しい状態にあったが、尾張の野村秋足が補訂を行い、残った後編18巻18冊も明治20年（1887）に岐阜の成美堂から刊行できた。出版といえば、お金が儲かると思っている人もいるかもしれないが、前近代の出版事業（今も学術出版はそうだが）は、基本的に費用は自己負担であり、谷川家は『倭訓栞』に家財をつぎ込んで出版を完了させたのである。その後、明治30年に井上頼圀（よりくに）・小杉榲邨（すぎむら）が後編を割愛したうえで内容を増補した『増補語林 倭訓栞』を刊行する。岐阜の成美堂は明治24年の地震で所有していた『倭訓栞』前・中・後編、すべての板木を焼失したが、全編の合本を活版で明治34年に出版し、執念を見せた。

谷川士清 たにがわことすが
国学者
1709～1776
宝永六年（1709）生、安永五年（1776）没。今の津市八町で学問教授と国学の研究と診療の日々を送った。

だが、ウェブスター辞典を参考にし、古語・漢語にかぎらず普通語や外国語まで4万語を収録した、本格的な近代的辞書である大槻文彦編『言海』（明治22～24年）が刊行され、実用辞書は以後『言海』が模範となる。『倭訓栞』の出版完了は遅かった感が否めない。

存命中、士清は『倭訓栞』の出版事業の行く末がどれだけ予想できていただろうか。士清の辞世の歌は「何ゆへに砕きし身ぞと人問はばそれと答へんやまとだましひ」。谷川士清と『倭訓栞』、果たして運が良かった悪かったか。それは読者に判断をゆだねたい。

［左］谷川士清が生前に草稿を埋めた谷川神社内の反古塚
［中］福蔵寺の谷川士清墓碑
［右］津市八町の谷川士清旧宅
［誌面中央］
県指定有形文化財「紙本淡彩谷川士清像」（津市所蔵）